

①【相談・連携】に関する主な意見

全体的に出ている意見

- ・若い世代との交流を活性化させる。
- ・どうしたら町内会や地域の集まり（サロン、100歳体操など）に参加してもらえるのかを考えないといけない。
- ・子どもを持つ家庭や子ども自身が抱える悩み相談が聞こえにくく、自分たちで抱えていることが多い。
- ・市役所の課が多く、どこに相談すればわからず、一括して相談できるところがほしい。公的な窓口は各々あるが、相談窓口同士の連携も必要。
- ・相談を受けても、民生委員は行政につなぐことしかできない現状。行政につながりやすくなれば、民生委員の負担も減る。
- ・個人情報などの壁などにより、困っていることを見つけるのが難しい。見えないところの支援が必要。また、専門分野の垣根を感じる。どこにつなげたら良いかが明確になるとつなぎやすい。
- ・コロナにより自治会や地域での活動が減った。

中部ブロックで見られた意見

- ・社協に連絡したらすぐに動いてくれるため、何かあれば社協に連絡している。
- ・学校に行けない子が学習できる場所が相浦と大野にある。学校以外の場があると親も子どもも安心。利用する側が知らないことがあるため、もっとPRが必要。
- ・男性は施設の中でも1人の時間が多く、引っ込みがちなため、男性を社会に引き出すことが必要。

東部ブロックで見られた意見

- ・子ども（小学生）が少なく、見かけない。
- ・コーディネーターが窓口になっているが、普段の業務+αなので大変である。また、コーディネーターも研修を受けているだけなので、大変なこともある。
- ・もみじヶ丘では月2回独居高齢者を訪問し、安否確認や話し相手になっている。相手に合わせて訪問するので情報があったら嬉しい。

北部ブロックで見られた意見

- ・ケア会議への参加（コロナ時はオンライン）。リハビリ職としての助言と地域で生活するための視点。
- ・保・幼・小の連携を深める。
- ・保育園では、保護者との関わりが大切で、子ども+αで親との信頼関係が必要。支援しようにも必要としない親もあり、説明や理解が難しいこともある。

②【地域力】に関する主な意見

全体的に出ている意見

- ・気軽に相談しやすいような雰囲気づくり（家庭に問題があっても相談できない）。人とのつながりが地域力につながる。話し合いができる場も必要。
- ・地域のいろいろな会合に積極的に参加して、つながりと情報を得ている。つながりを密にすることで、見えてくる課題も多くなり、解決できる課題も増えるはず。また、顔見知りも増え、いざという時に頼ることができる。
- ・つながるための種をまくための交流の場づくりをする。まずは賛同してくれる人を大切に、その人を中心に動かしていきながら、負担をかけすぎないようにサポートする。
- ・若い世代（特に大学生）との協働により地域に活力を持たせたり、様々なイベントを開催する。特に、学童やサロンなどの活動に入れると良い。
- ・町内会の未加入者（地域の輪に入らない人）を減らす（4割未加入）。入らないと情報がわからない。また、町内会にネガティブなイメージがあり（例：ゴミ出し、改修、回覧板）、入らない人が増えているため、町内会のあり方を変える必要がある。

中部ブロックで見られた意見

- ・思い出の音楽にふりをつけたり、大学生に協力してもらったりして 100 歳体操をつくる。
- ・現状の理想の知識を共有できる場にて知識を高めることも大事。少しでも知っていることが多い方が良い。
- ・公民館の活用、語らいの場所づくりなどを進める。

東部ブロックで見られた意見

- ・子ども会ではなくても、子ども同士や地域がつながる機会づくりを。
- ・大学の授業の一環としてボランティア活動があれば良い。案内文を出す→ボランティアセンターの活用→学生への情報発信。
- ・呼びかけ方の工夫（SNS 等）で参加者が増えた。
- ・支援の先にある人と人とのつながりをいかにつくり、つながってもらうか。来ない人はまったく来ないし、来た方が良い人ほど来ない→どうするのか。

北部ブロックで見られた意見

- ・保育の現場で、支援が必要な子どもが増加→保護者と保育士の関係づくり。地域（民生委員）からの見守り。
- ・高齢者宅を毎月 1 回訪問し、良き話し相手になることを心がけ、関係をつくる。
- ・自治会での顔合わせが少ない。顔を合わせて表情が見える方が伝えやすい。
- ・教育機関と地域の情報共有（コミュニケーション）のシステムをつくる。

③【つながる仕組みづくり】に関する主な意見

全体的に出ている意見

- ・高齢者にとっては交通や買い物が不便なので、頼れる仕組みをつくるべき。
- ・活動を増やすとボランティアの負担が増えるため、有償ボランティアにする。
- ・どの面でも若者の助けは必要なため、地域と学生をつなぐ仕組みをつくる。
- ・役員の方が固定化されている。1人に負担をかけない仕組みにする。
- ・相談する場所があるということを知らない人たちにどう知らせていくのかが重要。情報発信が不足しているため、情報発信の仕方に工夫が必要。
- ・まずは行政とつながる仕組みをつくる。行政の横のつながり→長寿、障がい、子育て、生活福祉課が連携して対応できるようにする。

中部ブロックで見られた意見

- ・子どもの遊び場がなく集まる機会がないため、つながりが薄い。子どもの集いの場をつくる必要がある。（参加してもらいたい親子が来ない課題がある。）
- ・ひとり暮らし（お年寄り）のところに1月に1回様子を見に行く（民生委員）。信頼関係づくりが大切。
- ・発達障がいを親が受け入れきれない。保育士や学校の先生からは言いにくく、民生委員として「おかしいな」と気付いても角が立つので言い出しにくい。→親が先に早く気付かないと十分な対応ができない。初診が遅れるほど子どもが適切な教育を受けられない。
- ・地域コーディネーターや介護認定の流れ（ケアマネ、主治医、市役所）を知る機会をつくる。

東部ブロックで見られた意見

- ・地域力を高めるために、魅力ある町内会をつくり入ってもらう。子どもも参加したくなるようなものを考えていく。
- ・民生委員の存在を知らない人に、活動の役割を認識、知ってもらう。
- ・ボランティアの情報が少なく、ボランティアセンターの存在も知られていないので、ポップを使った案内やポスターなどを大学等に配布してもらったり、学生メールを利用することで、関わりが増えるのではないかな。

北部ブロックで見られた意見

- ・地域の人が支えてくれるのは良いが、過剰に頼る（甘える）人も出てくるかもしれないため、有償のボランティア活動（地域お助け隊など）←若い世代も参加しやすい。
- ・子どもと高齢者の関わりを保育園で設けたり、日頃から子どもと関わる機会を増やして協力してもらおう。（敬老会などで関わりを）
- ・コロナ明けで、今後少しずつ活動の参加が増えてくれば、きっかけが増える。

専門部会の主な検討内容とりまとめ

①つながり、支え合う地域づくり部会

【第1回専門部会検討内容】

第1回目の専門部会では、アンケート調査結果や座談会の意見をふまえ、本計画で解決すべき地域の課題の整理と、課題解決のために取り組むべきことを検討しました。

地域の課題	課題	課題解決のための取組
隣近所との付き合い	<ul style="list-style-type: none"> ・近所の方でも人となりを知らず挨拶以上の付き合いには発展しない。(地域のつながりの希薄化) ・近所の人々の家族構成を知らない。 ・核家族が多い。 ・知り合いが少ない。 ・会話や親睦会によって付き合いを深める必要がある。 ・良かれと思いつい行くことも迷惑に思われることがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・イベントの開催。(3世代型、子どもを中心としたイベントなど) ・居場所づくり。(会話親睦、コミュニティセンターを活用した飲食可の集いなど)
町内会の存続や活用	<ul style="list-style-type: none"> ・町内会加入率が低下している。 ・参加者の高齢化が進んでおり、若い人の参加が少ない。 ・働いている世代に余力がない。(仕事や家庭のことで手一杯) 	<ul style="list-style-type: none"> ・イベントの開催。(町内会長同士の関わりや交流) ・市民大清掃に参加しやすい仕組みづくり。(時間や日時の固定といったルールの見直し)
地域のイベント・行事の開催	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナの影響による開催ができなかった。 ・知り合いが少ない。 ・参加しにくさ。(日時、参加しても大丈夫かという不安) ・参加者の減少。 ・働いている世代に余力がない。(仕事や家庭のことで手一杯) ・夏・秋祭りの整備が難しくなっている。 ・子ども会の活動レベルの低下。 ・専門職(医療・介護スタッフなど)の地域参加が難しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・行政の補助があれば開催しやすくなる。 ・イベントをしても駐車場がない。バスの増便が必要。
担い手不足	<ul style="list-style-type: none"> ・活動への参加者減少。 ・地域活動のリーダーに負担がかかっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・第2層コーディネーターを増やすことで負担軽減と手厚い支援ができる。
地域の課題解決体制	<ul style="list-style-type: none"> ・気づきがあってもどこに伝えれば良かわからない。 ・情報を知らない・知る手段がない。 	
健康づくりの推進	<ul style="list-style-type: none"> ・市民自身の健康づくりの意識向上が必要。 ・地域の中に通いの場がない地域があ 	

地域の課題	課題	課題解決のための取組
	る。	
日常生活における多様な課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 買い物するのに不便な地域がある。 ・ 交通の便が悪い地域がある。 ・ ゴミ出し、電球交換などができない高齢者がいる。 ・ 収入が少ないなど経済的な課題を抱える世帯がある。 ・ 地域包括支援センターを知らない高齢者がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ちょっとした困りごとであればボランティアや近所といった地域の方でやっているとところがある。もっと広げたい。
災害対策の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・ 災害時の声掛け。 	

【第2回専門部会検討内容】

第2回の専門部会では第1回で出された地域の課題の中で特に重要な課題に対して、それが解決された将来の理想の姿を考え、それに向けて取り組むべき事項を整理し、本計画に盛り込む新規施策として検討を行いました。

解決すべき課題	将来の理想の姿	取り組むべき事項	新規施策案
【隣近所との付き合い】 <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域共生サロンは日時や場所によって参加者属性の偏りがある。特に男性の参加が少ない場所が多い。 ・ サロンが「高齢者」というイメージが定着してしまっている。 ・ 団体間の情報交換の場がない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 気軽に参加できる行事が増えている。当日ふらっと参加しても大丈夫な行事。(名切中央公園の夏祭りのイメージ) ・ 自分の趣味や取組を披露できる場所が市内にたくさんある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 行事の開催時間の工夫を行い、参加できる人達を増やす。 ・ 行事を気軽に寄れるものにし、子どもたちも巻き込んで楽しめるものを開催する。 ・ 1人でも参加しやすい行事やプログラムを増やす。 ・ ボランティアの体験会をイベントなどと同時に開催し、参加者のすそ野を広げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新たな行事を地域で実施していくための、事例や情報の提供。 ・ 自治協議会同士がつながりを持つためのプラットフォームづくり。(自治協だよりだけでなくデジタルも活用)
【地域のイベント・行事】 <ul style="list-style-type: none"> ・ ボランティアが集まらず開催できないケースが多いことや役員のなり手がいないことが特に課題。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 行事開催前から練習等の準備を行うことができる体制がある。 ・ 年輩の方と子どもたちのコミュニケーションが増加し、そこに自衛隊や大学生など若者も協 	<ul style="list-style-type: none"> ・ イベント開催に向けたクラウドファンディング。 ・ 防災対策として、ボードゲームイベントなどを通じて地域のつながりづくりと訓練を同時に行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ SNSを活用した情報発信。 ・ 行事への補助金メニューの創設や、地域で行うための仕組みづくり・マニュアル化。

	<p>力をすることで、行事が盛り上がっている。</p>	<p>・公的支援として、行事開催のための予算支援や行事を実施するためのアイデアなどを提供。</p>	
<p>【災害対策の充実】</p> <p>・水害や土砂災害が多くなっており、避難行動を速やかにできるような体制づくりは進んでいるものの、地域の中での助けあいがより進むことが望ましい。</p>	<p>・避難所までの安全な移動ルートが確保されている。</p> <p>・広報（LINE・ラジオなど）による市民の防災意識向上の取組が充実している。</p>	<p>・消防団の人員を強化し、体制を強化する。</p> <p>・いざという時の連絡先が地域の中でも共有できている。</p> <p>・有事の際に備えて企業との協定を結ぶ。</p>	<p>・企業の青年部と連携した企業の地域貢献活動の体制づくり。</p> <p>・企業の協力を得られるようインセンティブなどの仕組みづくり。</p>
<p>【日常生活における多様な課題】</p> <p>・日頃のちょっとした電球交換やゴミ出し、見守り等が求められている。</p> <p>・ボランティアも高齢化しており、若い人の流入が必要。</p>	<p>・かゆいところに手が届く支援・支え合いが地域の中で行き届いている。</p>	<p>・有償ボランティアの推進をして、若い人も参加できる環境をつくる。（ポイント制でも良いので、還元できるものを用意する。）</p> <p>・困っている人とお手伝いできる人のマッチング支援。</p> <p>・デジタルを活用した、若い人にボランティア登録してもらえる環境づくり。</p>	<p>・大学のほか自分の生活圏等身近にアクセスできるボランティアのプラットフォームづくり。</p> <p>・有償ボランティアを進めるための協賛企業の募集など。</p> <p>・中高生～若者世代を巻き込めるSNSなどを用いた広報。</p>

②市民活動を支える基盤づくり部会

【第1回専門部会検討内容】

地域の課題	課題	課題解決のための取組
相談体制の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・相談する場所がわかりづらい・わからない。 ・相談する場所・できる場所が少ない。（特に若い人） ・相談から支援へつなぐ体制づくり。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相談窓口の周知に力を入れる。 ・相談窓口動詞で情報共有や連携を行う仕組みづくり。（一つの様式で共有できる仕組み）
情報発信の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・情報発信の方法が難しい。 ・情報共有の体制づくり。 	<ul style="list-style-type: none"> ・受け手に対するアプローチの工夫。 ・わかりやすい情報発信が必要。
生活利便性の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・地域によって交通が不便。 ・買い物や通院ができない人への移動支援。 ・高齢者の免許返納後の移動手段。 ・移動販売や買い物支援策がない。 ・交通に関する助成のメニューがない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・移動販売。（デイサービスや事業所、公民館、市営住宅を活用） ・有償ボランティアの活用。 ・買い物支援。 ・ウーバーイーツの活用。（食べ物以外の買い物）
子育て支援の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・保育や学童の質の向上。（担い手不足を含む） ・子育て支援が届かない。 ・子どもの貧困対策。 ・子育て世帯の抱える課題の多様化。 ・子どもの居場所づくり。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生のボランティアの力をかりる。
各種福祉施策の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・障がい者の自立促進。 ・生活困窮者等への経済的な支援の充実。 	
複合的な課題への対応	<ul style="list-style-type: none"> ・ヤングケアラーへの支援がない。 ・子どもの貧困対策やひとり親への支援。 ・ひきこもり支援やゴミ出し・ゴミ屋敷の問題の解決。 ・8050問題や老々介護の増加。 ・地域のつながりの希薄化により複合課題を抱え込む世帯の増加。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの体調不良の際の支援の充実。（病児保育、ファミリーサポートセンターを利用しやすい仕組みに）
自助力・互助力の低下	<ul style="list-style-type: none"> ・民生委員の負担が増加。 ・居場所づくりの推進。 	
事業所等の人員不足	<ul style="list-style-type: none"> ・介護・福祉の職員の減少。 ・サービスの維持が困難になるのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ふくし教育の推進。

地域の課題	課題	課題解決のための取組
その他諸施策について	<ul style="list-style-type: none"> ・災害対策の推進。 ・地元就職の促進。 ・保証人、医療の同意、身元引受人の問題。 	<ul style="list-style-type: none"> ・災害対策に関する大学の取組を地域にも知ってもらい連携していく。

【第2回専門部会検討内容】

解決すべき課題	将来の理想の姿	取り組むべき事項	新規施策案
<p>【事業所等の人員不足】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サービスの存続のために十分な人材を確保することができなくなっている。 ・待遇や職場環境の是正は事業所努力だけでは解決できないところまで来ている。 ・雑務や事務作業も多くなっており、現場の負担は増し続けている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・現場の負担が軽減され、利用者とのコミュニケーションの時間が増えている。 ・待遇などを個別相談でき、自分の働きたい環境で働くことができるようになってきている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・行政と事業所との協議の場を設け、その中で待遇なども個別設定ができるような検討を進める。 ・高齢者の働き先として福祉職関係の仕事に就けるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・分野別人材バンクや働きたい高齢者や障がい者と事業者をマッチングできるようなシステムの構築。 ・福祉職に就く人への補助金制度の設立。 ・退職者への支援の充実など、福祉職の働きやすさの向上。
<p>【生活利便性の向上】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・移動や買い物が不便で、それに対する支援策なども現状は少ない。 ・乗り合いタクシーなどもモデル事業で行っているが、使い勝手が悪い。 ・家の掃除や庭の剪定、草むしりなども困っている人が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・移動や買い物が便利にできるようになっており、住み慣れた地域で暮らすことができる。 ・受けたい支援が受けられる環境が整っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・市街地でもバスが減って不便になりつつあり、大通りから離れると移動手段がない為、公共交通機関から自宅までの移動手段を確保する。 ・移動販売などは増加しており、官民協働でより拡充していくことが重要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・買い物支援とカーシェアを一体化したサービスの提供。 ・電動アシスト自転車の補助金やシェアサービスなどを進めて、小回りの利く移動手段を確保。 ・Uber Eatsのようなイメージで買い物代行をしてくれるような体制づくり。 ・有償ボランティアで移動支援や買い物支援をできるような体制づくり。 ・移動販売や買い物を届けてくれるサービスの普及を官

			民で行う。
<p>【複合的な課題への対応】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実際にこういった課題は増えているが、相談から支援につながりにくかったり、つながっても解決の手立てをつげづらい。 ・そもそも相談しない人がこういった課題を抱え込んでいるケースが多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・重層的支援体制が構築され、分野横断的な対応ができるようになってきている。 ・相談体制の充実として、分野横断的に受け付けたり、アウトリーチで複合的な課題を抱えている人を掘り起こせるようになってきている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・重層的支援体制の中に、NPOや地域の活動団体が積極的に関わられるような体制を作り、細やかな支援体制を作る。 ・福祉以外の分野も重層的支援体制の中に取り入れ、対応できない課題がないようにしていく。 ・個人情報取り扱いなどを柔軟に対応できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・重層的支援体制整備事業の着実な推進。 ・必要な支援を迅速に提供できるような体制づくり。(行政だけではスムーズに進められないケースは社会福祉協議会やNPO、地域の活動団体も巻き込んで推進)
<p>【子育て支援の向上】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他の福祉分野に比べて、困っている人へ支援が届きにくいことが多い。 ・共働きでも安心して子育てができる環境づくりが必要。 ・教育環境の底上げなど、子どもにとって良い環境が提供できるような施策展開が必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが子どもらしく暮らせる環境がつけられている。 ・親も子どもも安心して育つことができる環境づくり。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事業の隙間を埋められるようなアプローチを積極的に進める。 ・子育て中の親に届く情報発信のやり方を考える。 ・母親同士が知り合える環境や交流できる場所を充実させる。 ・親も子どもも安心して過ごせる場所づくり。 ・子どもの自由を許せるような空気感のある地域づくり。 	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニティスクールなどを活用した地域の人と子どもが交流できる機会の増加。 ・大学生ボランティアを活用した、母親のリラックス時間を提供できる場所づくり。 ・統廃合で使わなかった学校を、地域の子どもたちが集まれる場所として運営。